



**Inward Mission for Japanese Universities
November 2015**

**ブリティッシュ・カウンシル主催
第 7 回英国大学視察訪問報告書
9 - 12 November 2015, UK**

目次

1. はじめに	Page 2
2. University of Stirling	Page 4
3. Northumbria University	Page 10
4. Newcastle University	Page 15
5. Manchester Metropolitan University	Page 18
6. University of East Anglia	Page 25
7. 巻末資料(第 7 回英国大学視察訪問参加者リスト)	Page 31



はじめに

英国の公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルでは、日本の大学で国際企画、国際交流を始め様々な部署でご活躍の教職員の方々を対象に、英国の高等教育システムおよび大学の国際化に関する諸施策への理解を深めて頂くことを狙いとして、2015年11月9日から12日までの日程で、「第7回英国大学視察訪問」を実施致しました。

プログラムには、13大学(国公立大学9、私立大学4)、及び日本学術振興会ロンドン研究連絡センターから、総勢19名にご参加頂きました。訪問先は、スコットランド中部に位置し、115カ国以上の国籍を持つ国際色豊かなキャンパスを持つスターリング大学、近年新たな国際戦略を策定し、研究力評価を大幅に上げたノーサンブリア大学、ラッセル・グループの構成校であり、大規模研究大学として海外との研究連携に力を入れるニューカッスル大学、新たな国際化戦略を策定し、新しいキャンパスを誇るマンチェスターメトロポリタン大学、近年海外パートナーシップ構築における優先5カ国の一つに日本を位置付けたイーストアングリア大学の5大学です。

スコットランドからイングランド南部まで、教育システム、歴史と規模という点で特色が異なる5大学での視察を通して、各大学の国際戦略、ブランディング戦略、学生の海外派遣支援・留学生支援の取り組みなどについて、比較対照をしながら理解を深めることができました。また、訪問先の国際部職員、日本と関わりのある教職員、日本人留学生とのネットワーキングの機会や、訪問先大学の担当職員とのディスカッションの機会も設けられました。

以下、本視察訪問の参加者全員にご執筆のご協力を頂き、視察訪問報告書を作成しました。参加者の皆様が視察訪問をとおして得られた情報や知識、ご感想を広く共有させて頂き、日本の大学のあらゆる部署において日々、留学生や協定校関連の業務に取り組まれている方々のご参考となりましたら幸いです。

ブリティッシュ・カウンシル

【第7回英国大学視察訪問開催概要】

実施日時：2015年11月9日(月)～11月12日(木)

日本側参加機関：(アルファベット順)

茨城大学、慶應義塾大学、神戸大学、京都大学、九州大学、長崎大学、名古屋大学、沖縄科学技術大学院大学、立命館アジア太平洋大学、東北大学、東海大学、東京工業大学、東京外国語大学 (計13大学)

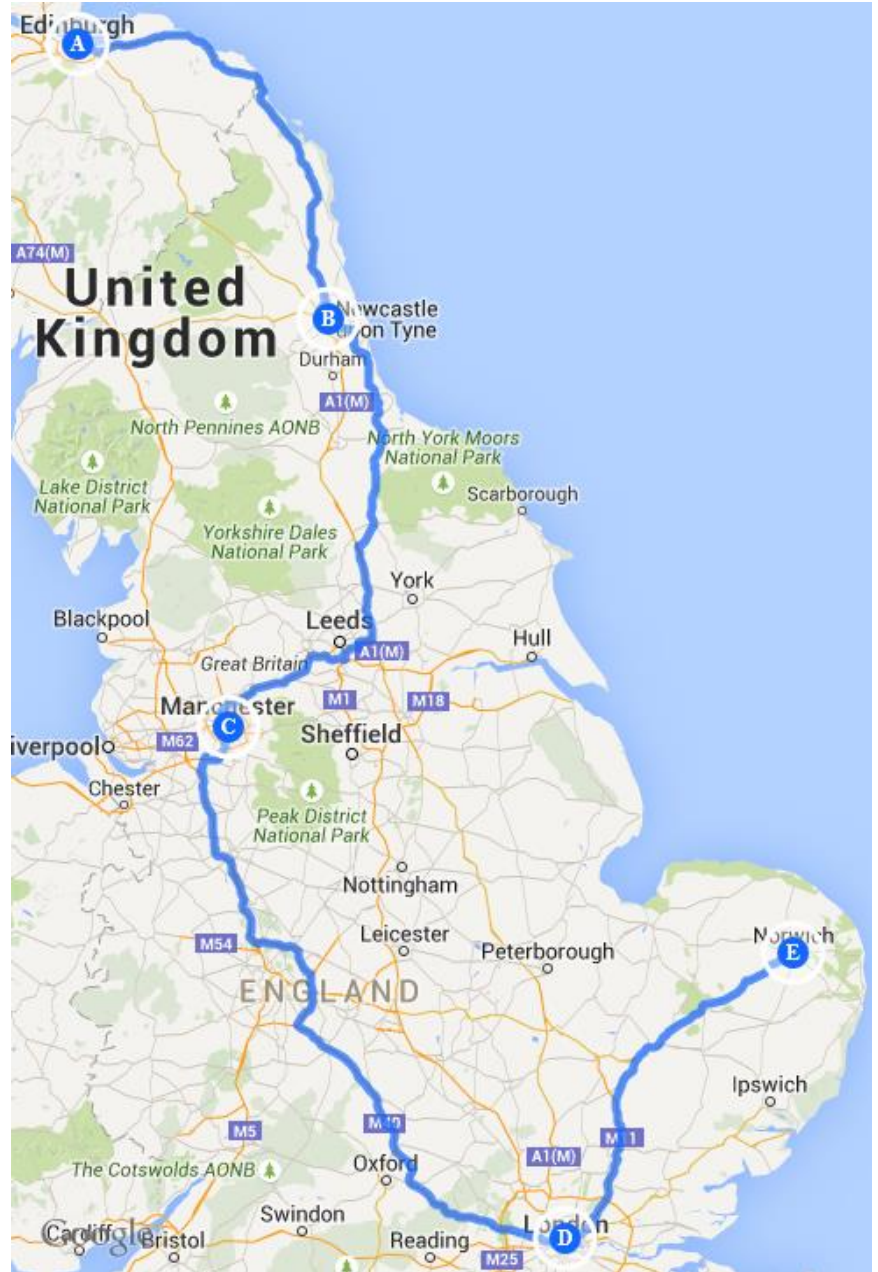
オブザーバー：日本学術振興会ロンドン研究連絡センター

主催：ブリティッシュ・カウンシル

英国大学視察訪問 訪問大学一覧

訪問日		訪問先
11月9日(月)	A	University of Stirling 訪問
11月10日(火)	B	午前、Northumbria University 訪問
	B	午後、Newcastle University 訪問
11月11日(水)	C	Manchester Metropolitan University 訪問
11月12日(木)	E	University of East Anglia 訪問
11月13日(金)	D	(オプション参加) 夕刻、ブリティッシュ・カウンシル本部にて、「Experience Japan Exhibition」(慶應義塾大学主催、ブリティッシュ・カウンシル共催の日本留学フェア)参加校代表者、本視察訪問参加者、及び英国大学代表者を迎えるのネットワーキング・レセプション

第7回英国大学視察訪問 国内移動マップ



本報告書は、参加者の方々にご執筆頂き、ブリティッシュ・カウンシルが全体のとりまとめを行った上で作成したものです。参加者の皆様のご協力に、深く感謝申し上げます。文中、金額はすべて2015年11月時点での£1=184円で換算しております。また報告書内、「所感」につきましては、執筆者である参加者の皆様のご意見であり、ブリティッシュ・カウンシルの公式見解ではございません。さらに4頁以降、参加者、報告担当者のご氏名は、所属機関名アルファベット順、敬称略で記載しております。どうぞご了承下さい。

1. 大学の概略

スターリング大学は、スコットランド中部に位置する大学で、1967年に設立。設立後50年以下の世界の大学を対象としたランキング Times Higher Education (THE) 100 Under 50 Rankings 2015 では、第47位にランクイン。学生の5人に1人が115カ国以上の国籍を持つなど、同大学は国際色豊かなキャンパスを誇っている。40年に渡り、日本を含む80校以上の海外協定校との連携を通して、学生の移動、共同研究、教育連携を推進している。毎年交換留学プログラムの需要は高まっており、10人に1人の学部生が学位プログラムの一環として海外に留学している。また、日本の大学との教育・研究における多次元での連携構築も積極的に行っている。

2. 訪問スケジュール

- 10:00 歓迎の挨拶 (Malcom MacLeod, Deputy Principal)
- 10:15 スコットランドの高等教育の紹介 (Beverly Whitehead, Assistant Director, Development and External Affairs)
- 10:35 スターリング大学の紹介 (Stephanie Niven, Assistant Director, Head of International Affairs)
- 11:15 国際化への取り組み紹介 (Shonagh Maak, Internationalisation Manager)
- 11:35 国際協定の取り組み紹介 (Beata Chrystal, Sheila Mills, International Partnership Managers)
- 12:00 キャンパスツアー
- 13:00 ネットワーキングランチ
- 14:00 交換留学の取り組み紹介 (Jo Hagerty, International Exchanges Manager)
- 14:30 学位取得を目的としない留学生への取り組み紹介 (Maria Cid Castilla, Internationalisation Manager)
- 15:00 日本人学生と留学生への質疑応答 (Leigh Robinson, Dean of Internationalisation)

3. 発表要旨

歓迎の挨拶

Malcom MacLeod, Deputy Principal at the University of Stirling


スターリング大学側を代表して、Malcom MacLeod氏より歓迎の挨拶が行われた。スターリング大学は多文化環境が進展する中で、パートナーシップの拡大、現在の海外留学生比率を15%にすること、世界における大学の評価格付けをさらに向上させることを目指して、様々な取り組みを実施しているとの説明が行われた。そのため今後とも日本の有力な大学と戦略的な提携交流を積極的に行っていきたいとの希望表明がなされた。



スコットランドの高等教育の紹介

Beverly Whitehead, Assistant Director, Development and External Affairs

スコットランドの概要と高等教育の現状説明が行われた。スコットランドは英国を構成する4つの国の一つであり、独自の教育システム、法律と議会を持っている。現在特に金融サービス、生命・生物科学、エネルギー、食品・飲料、観光、繊維、デジタルメディア、大学教育の発展に力を入れている。スコットランドの人口は約500万人。スコットランドはバグパイプやスコッチウイスキーだけではなく、電話、MRI スキャナー、TV、ペニシリン、世界



で最初のインターネット検索エンジン等を実用化した国である。大学教育の歴史は15、16世紀に遡り、現在19の高等教育機関が存在。大学の規模は1,000人クラスの小規模大学から25,000人クラスの大規模な高等教育機関まで存在する。19の高等教育機関において、大学生数約21万6000人、留学生数は180か国以上から約4万8000人、教職員数は約3万8000人、その内外国人職員数も約7,000人に上る。研究面ではイスラム研究、フェスティバルやイベントマネージメント、ファッションデザイン、ゴルフマネージメント等において特色のある教育研究が行われている。

学士号課程は4年間で、各年度2セメスター制で行う。スコットランドの教育は、Scottish Credit and Qualifications Framework（スコットランド単位資格制度）により行われている。スコットランドではイングランドと異なり大学の学士号課程は4年間であり、修士号は1年以上、博士号は3年で学位取得が可能である。学部教育はYear 1（1-2セメスター）：Breadthで3科目を学び、Year 2（3-4セメスター）：Flexibilityとあわせて、3年以降の専門的な科目を決定する準備期間であり、これらの2年間で基礎的な科目を中心に受講し、3セメスターの終わりに将来の専門課程を決める。Year 3：Depth（5-6セメスター）とYear 4:Depth（7-8セメスター）では専門科目を学ぶ。

スコットランドの教育の特徴として；

- ① 高い在籍率と卒業率
- ② 高い就職見込
- ③ 卒業後の高い平均給与
- ④ オールラウンドな学生体験として以下が挙げられる

- ・ 全体的な授業満足度
- ・ 学生を受入れる文化と親しみやすさ
- ・ 世界中からの留学生
- ・ スポーツ施設の充実
- ・ 安全性

また、スコットランドは共同研究へコミットしており、以下のことに注力している


- ・ 学校や短大との連携
- ・ ジョイントプログラム、コースの明確化
- ・ スコットランドの海外への発信

スターリング大学の紹介

Stephanie Niven, Assistant Director, Head of International Affairs

スターリング市近辺の観光地等の紹介に続いてスターリング大学の紹介が行われた。スターリング大学は1967年に創設され、世界で最も美しいキャンパスを持つ大学とも称される。キャンパスは330エーカーの土地にあり、Airthrey湖の周辺に建設されている。大学の歴史は新しいが、革新的、知的、文化的な大学としての役割を果たすことを重視し発展してきた。The Times Higher Educationにおけるスターリング大学のランクは英国全体で61位である。特に看護及び助産、教育、スポーツ研究、コミュニケーション、文化とメディア研究等の研究部門ではスコットランドにおいてトップを誇る。現在の学生数は約13,000人、その内、学部生が約8,800人、大学院生が約3,500人である。115か国からの留学生を受け入れており、全学生数の23%を占めている。





スターリング大学は World University Ranking2014 の QS star において 5 つ星を取得している。学部レベルの留学生は約 8 割が米国籍、次にカナダ、ノルウェー、ブラジル、日本、オーストラリア等である。大学院レベルでは留学生の約 8 割が中国、次に米国、ベトナム、インド、ナイジェリア等から来ている。本学には 7 つの学部がある。応用科学部（犯罪学、社会政策、社会福祉、社会学）、人文学（英語、映画及びメディア、グローバルシネマ & 文化、ジャーナリズム、言語、法律、哲学、政治、宗教）、教育学部（初等教育、中等教育、体育）、スターリングマネジメントスクール（会計、ビジネス、経済、ファイナンス、人事管理、マネジメント科学、マーケティング）。自然科学部（水産養殖、生物学、コンピューター学、エコロジー、環境科学、地理、海洋生物学、数学、心理学）、健康科学部（成人看護、精神保健看護）、スポーツ学部（スポーツ・運動科学、スポーツ研究）等である。

スターリング大学では 2 セメスターは制度（9 月～クリスマス、2 月中旬～5 月末）を採用し、夕方の遅い時間の講義や夏季集中講義も行っている。学部全体では 250 を超える様々なコースが用意されている。スターリング大学の特徴は、経済や経営学における実践的なビジネス教育、メディアやスポーツ、宗教や英語学に力を入れていることである。また自然科学分野における環境科学は、近年の環境への関心の高まりを背景として、高い評価を受けている。それ以外にも多くの研究分野で英国の日刊紙タイムズ紙が発表する英国内大学教育評価で Highly Satisfactory を取得している。

国際化への取り組み紹介

Shonagh Maak, Internationalisation Manager


1999 年にトニー・ブレア元首相により発表された、英国政府主導による留学生支援政策（PMI: Prime Minister's Initiative）が英国の大学の国際化の動きを加速させた。これは 2000 年からの 5 年間で英国の高等教育機関への留学生数を 5 万人増加させるというもので、実際には目標数値を 7 万人上回る成果を達成し、スターリング大学においても留学生数が大幅増となった。この期間に国際交流における基盤作りに成功し、現在、互恵的な協定締結を目指している。なお、スターリング大学の国際化への目標には留学生の獲得だけでなく、英国人学生の送り出しも含まれており、現在では 10 人に 1 人は海外留学中である。現状に満足することなく、獲得・送り出し数共に更に増やすために、自大学の学生が海外留学に興味を持つきっかけを与え、また留学生にとって心地よい空間にするための取り組みを続けている。例えば、『Japan Week』と銘打ってキャンパス内に日本国旗や日本の写真を大きく貼りだし、日本食や日本文化に関する様々な出し物をする。そうすることで、日本人留学生は徐々に日本を感じられ、企画に携わることでスターリング大学の学生との交流を深めることができると同時に、スターリング大学の学生にとっても日本に関心を抱くきっかけとなることを狙いとしている。また、学生組合と連携し、国籍別にプログラムを提供し、全ての学生にとって魅力的なプログラムであるか調査をしている。今後もこの路線を継続していき、就職と結びつけること、大学全体と学部ごとの目標・狙いを合致させること、教職員の教育・サポートをより充実させることなどを課題としている。

国際協定の取り組み紹介

Beata Chrystal, Sheila Mills, International Partnership Managers

上記で触れられた、互恵的な協定締結数を増やすために、7 学部を 2 人の国際パートナーシップマネージャーがそれぞれ分担。学部の担当者や毎週ミーティングを行い、大学全体の方針と学部ごとの方針のすり合わせや、それぞれがなすべきことなど綿密に打ち合わせている。学生の多様な要望に応えるために、例えばスターリング大学が強みとする学術分野などに特定せず、あらゆる分野・国と協定締結を目指している。日本では関西学院大学との結びつきが強く、今年度からはダブルディグリープログラムを展開している。





キャンパスツアー

学生代表とスタッフによる、日本人建築家が制作したモニュメントや国立水泳アカデミーとして設置されている水泳施設、学生寮などの各所を視察した。白鳥のいる湖やいくつもの橋、現在は事務室や教室としても利用されている18世紀の古城などがあり、どこの国で育った学生も美しいと思うであろう景観であった。キャンパス内にいくつものバスが走っており、寮を出て、キャンパス外の宿泊施設に滞在する学生にとっても通学が容易になっている。また、マクロバート・アートセンターという娯楽施設があり、ここには映画館やレストラン、様々な展示物があり、一般にも広く開放されている。

交換留学の取り組み紹介

Jo Hagerty, International Exchanges Manager

スターリング大学にはエラスムス交換プログラムと大学交換プログラム2種類のプログラムがある。2012年にはエラスムス交換プログラムでは計42名を、大学交換プログラムでは46名を派遣した。後者は授業料免除のヨーロッパ以外の協定校との双方向プログラムである。派遣した人数は3年生全体の4%を占めている。また、3年生あるいは4年生の学生に年単位での留学を勧めており、スペイン語とフランス語などを履修している学生には留学が義務化されている。2015-2016年度には90名の学生をエラスムス交換プログラムで、133名の学生を大学交換プログラムで派遣している。派遣者数は3年生全体の11%を占めており、留学人数が以前と比べて増加している。現在は交換留学枠に限られているため、留学期間を短縮することによって、より多くの学生を派遣できるよう学期単位で学生を派遣している。人文系学生だけではなく、自然科学系や環境科学の学生の留学する割合が増えてきた。現在では夏期プログラムも提供している。

海外留学の情報は、早い時期から申請日、オープンデー、高校へ出張するリクルートチーム、ウェブサイト、出版物などを通して常に提供している。また、留学から帰国した学生からのポジティブな反応などは留学成果を評価するのに欠かせないものであるため、学生からのフィードバックに従い今後留学先を増やす予定である。留学先は主にアメリカ、カナダ、オーストラリア、日本、香港、欧州であり、語学プログラムは主にケベック、モロッコ、南米諸国などである。去年開始した中国での留学は成功を収めた。


3、4年生の留学は学位取得プログラムの勉強に追われ自分が履修したい科目を自由に選択することが出来ないため、柔軟性のある2年時の夏期留学を増やす考えである。現段階では看護学部、教育学部、ソーシャルワーク学部の学生にとって学期単位の留学は困難であるが、学生全員が留学の機会に恵まれるよう努力している。また、学生が留学先を決定した後は、起こりうる障害について考え、それを解決し、学生がスムーズに留学できるよう努力する。国際化戦略のもと、2019年までに学生の15%が海外留学をするという目標を設定している。

学位取得を目的としない留学生への取り組み紹介

Maria Cid Castilla, Internationalisation Manager

学位取得なしのプログラム、即ちセメスタープログラム、国際サマー・スクール、英語語学プログラムの紹介があった。セメスタープログラムには交換交流、Study Abroad及びエラスムスがある。秋学期と春学期の2学期から構成されるが、前者は9月から12月まで、後者は1月から6月までである。1学期に約175名の学生が留学し、30 European Credit Transfer and Accumulation System (ECTS)¹単位を取得し在籍している自国の大学で単位認定を行う。

¹ European Credit Transfer and Accumulation System ECTS : 欧州単位互換制度



スターリング大学では専門家が学生の支援を行っている。キャリア開発センター、カウンセリング、資金管理、障害者サービス、礼拝サービス、ピアサポート、アカデミックサポートなどがある。キャリア開発センターでは学生の学習した内容などを確認し、就職活動におけるインタビューの練習を行っている。カウンセリングチームがあり、来英初期においては定着できるまで面談など通じて無料で支援を行う。資金管理においても物価などに詳しくない場合、お金を使いすぎないように指導を行う。また、ピアサポートスキームがあり、インフォーマルな環境で（コーヒーなど飲みながら）高学年の学生がボランティアで来英したばかりの学生の指導を行う。

【サマー・スクールについて】

実施時間は概ね4週間もしくは8週間（2016年では6月11日 - 7月9日、7月9日 - 8月6日）であり、毎回約180名の学生を受け入れており、アメリカの大学などに人気がある。歴史から哲学、マーケティングまで幅広い分野の授業を提供しており、この他文化研修もプログラムに含まれている。

【英語プログラムについて】

7週間の春期プログラム（2016年では2月8日 - 3月25日）と4週間の夏期プログラムがある。1週間20時間の集中講義（9:00 - 13:00 月曜日から金曜日まで）を行う。クラス分け試験（Oxford University English Language Test）を課し、テキストを提供し、最終評価を下す。その他、エジンバラ、グラスゴー、セント・アンドリュース観光や文化活動も組まれており、24時間事務体制で支援を行っている。宿泊施設については24時間チェックインできるシングルルームがあり、WIFIを提供し、24時間セキュリティも完備している。

日本人学生と留学生への質疑応答

Leigh Robinson, Dean of Internationalisation

スターリング大学に在籍している2名の博士課程の日本人学生と1名の留学生を招き、座談会が行われた。スターリング大学を留学先として選択した理由として、スターリング市内から近いスターリング大学の有利な地理的環境（エジンバラやグラスゴーからも近い）と研究の面などが挙げられた。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取組み・方針等について

【世界へのPR方法】

スコットランドの高等教育の紹介の中で、スコットランドの全25大学の概略の紹介もあった。通常ならば自身の大学のみの紹介にとどまる場所であるが、スコットランドは小さい国であり、チームスコットランドとして世界に発信しているという説明があった。日本でも特に規模の小さい大学では、スコットランドの大学同様に地域単位などでまとまりをつくり協働してPRすることで、世界の目に留まりやすくなる可能性がある。

【学生の流動化促進】

留学生の送り出しに関しては「交換留学の取組み紹介」で述べたように、留学をするスターリング大学の学生は増加している。その流れを止めてしまわないように留学期間を短縮させて多くの学生が留学できるよう柔軟な対応を行っている。受け入れに関しては手厚いサポート体制が整っており、現在キャンパス内の学生寮をさらに建築中であり、留学生の受け入れ態勢づくりに余念がない。



【同窓会ネットワークの活用】

スターリング大学の卒業生が大学の知名度向上に一役買っている。希望する者は新入生リクルート大使、地域大使、ゲスト講師といった役割が与えられ、大学に貢献することができる。また、アンバサダープログラムに参加した時間や、生徒と同窓会のつながり作り、などの観点から、アンバサダーとして最も活躍した人物には『Alumni Ambassador of the Year』という賞が与えられ、アンバサダーとしての業績が表彰される。同窓会支部は世界各国にあることはもちろんのこと、世界で実働的な活動を行っている点が印象的である。

5. 報告者所感

【競争指数の導入】

今回訪問した全ての大学に共通することではあるが、世界ランキングをはじめ、客観的な評価を重視しアピールする印象を受けた。特に気になったのが REF (Research Excellence Framework)² と呼ばれる英国独自の評価指数で、この評価の結果によって次年度の研究費の配分が決定されるため、どの大学もこの数値の公表を重視していた。日本でも REF のように国内ランキングの指標になりうるものを導入すれば、より競争意識が高まるのではないかと感じた。

【地域との結びつき】

大学を取り巻くそれぞれの事情はあるが、日本の大学よりも地域に密着した取り組みが多く見られた。日本でも街で見かけるレンタサイクルが大学敷地内にあり（街中にあるレンタサイクルの一部）、またナショナルトレーニングセンターも週末には地域の人向けのトレーニングプログラムが開催されている。さらに敷地内の映画館も開放されている。現在、日本の大学は国際化に向けて様々な動きがあるが、大学の特色を強めるためにも国内にも目を向けた新たな取り組みとして、地域との距離を縮め、自治体との結びつきを強めていく動きも求められるのではないだろうか。

【ブランディング戦略】

今回の訪問ではホスピタリティ溢れるもてなしを受けた。また、我々訪問者へのお土産にも凝っており、スコティッシュウイスキーで有名なスコットランドの大学らしく、大学名が入ったウイスキーグラスを頂いた。ただ大学名が入ったボールペンを作るのではなく、大学の土地柄を表すお土産づくりも、大学のブランディングの重要な一面であると感じた。



(報告担当：宇和川、奥村、申、源島)

² REF : 2014 年に発表された、英国高等教育機関の研究の質評価を行うシステム。 <http://www.ref.ac.uk/>.

1. 大学の概略

ノーサンブリア大学は、1880年に設立された Rutherford College をルーツに持ち、1992年に Northumbria University at Newcastle として大学となった。1992年にポリテクニクから昇格して大学となった New Universities と呼ばれる大学群の一つ。その教育の質は国際的に高い評価を受けており、学生満足度調査でも高い評価を得ている。また近年は研究力強化にも取り組んでおり、2014年 REFの結果に基づきタイムズ・ハイヤー・エデュケーション社が発表した「研究力評価ランキング」では2008年の80位から50位までに上昇した。

大学卒業後半年以内の就職率は90%で、英国内で10位に入る実績を持つ。在学生数は約34,000人、うち、100カ国以上からの留学生が23%を占めている。

2つの大学（ノーサンブリア大学、ニューカッスル大学）が近接して立地するニューカッスル・アポン・タインは、毎年45,000人の学生を受け入れ、英国で最も学生が住みやすい街として知られている。ノーサンブリア大学は、2014年10月にはロンドンキャンパスを新設した。

学部課程では応用科学、建築と構築環境、アーツ、ビジネス、コンピュータ科学、デジタルテクノロジー、デザイン、教育と生涯学習、ファンデーションや英語コース、地理学、健康管理、公衆衛生と福祉、人文学、法律、数学と情報科学、機械・建築工学、メディア・コミュニケーション学、物理学、電子工学、心理学、社会学、社会事業とコミュニティ、スポーツ、エクササイズ、リハビリテーションの20のコースがあり、大学院課程でもほぼ同様の多岐にわたるコースを提供している。

卒業生には Apple 社で iPhone、iPad 等のデザインを総指揮したジョナサン・アイブ卿（現在 Apple 社のチーフ・デザイン・オフィサー）、またティム・ブラウン（世界的に著名なデザイン思考の第一人者で IDEO の CEO）などがある。また、スポーツ・運動・リハビリテーションプログラムにも力を入れており、大学には最先端のスポーツ施設が完備され、パラリンピック水泳平泳ぎの日本人金メダリスト、鈴木孝幸氏も現在ここで学んでいる。



2. 訪問スケジュール

- 11:00 歓迎の挨拶(Jon Reast, Pro Vice-Chancellor(International))
- 11:10 ノーサンブリア大学における国際戦略の展開と推進(Rob Carthy, Director of International Development, Craig Moore, Associate Dean (International), Faculty of Arts, Design and Social Sciences)
- 11:30 海外大学との協定締結について(Alejandra Vicencio, International Partnerships Manager, International Development)
- 11:40 学生海外派遣増加の構想(Andy Garton, Study Abroad and Exchanges Coordinator)
- 11:50 質疑応答
- 12:15 ノーサンブリア大学のスポーツとその国際化施策における役割(Katy Storie, Competitions Manager)
- 12:45 スポーツセンター見学ツアー
- 13:15 昼食

3. 発表要旨

ノーサンブリア大学における国際戦略の展開と推進

Rob Carthy, Director of International Development

Craig Moore, Associate Dean (International), Faculty of Arts, Design and Social Sciences

ノーサンブリア大学では、学生が国際理解を深められるよう、大学の国際化を進めているという。その背景には、大学の使命として、学生が社会に出てから必要となるスキルや知識を得られるようにしたいということがあるそうだ。

毎年 3,000 人近くの留学生がキャンパスで学んでいる。また、海外との連携を強化しており、シンガポール、マレーシア、インドネシアなどの東南アジア地域では、現地の大学と連携した学位の提供を行っている。

明確な戦略と目標を掲げることは、国際戦略を行う上では、重要だと、Carthy 氏は述べている。そうすることで、着実に目標に向かい課題を遂行することができたという。今後は、オンキャンパスの留学生拡大を目指し、これまでビジネス系の学野では盛んだった国際事業をさらに他学野でも進めるとともに、ノーサンブリア大学で学ぶ学生にも海外への留学を進める。

その後、ノーサンブリア大学で行われている学部レベルの国際展開について紹介があった。Moore 氏の属す学部では、アート、デザイン、人文学、マスコミュニケーション、社会科学分野のコースが提供されている。そのうち、発表では日本との連携に焦点をあて、具体的な説明があった。短期の英語・文化研修や 1 学期・1 年の交換留学といった学生向けの連携だけではなく、教職員の人事交流や研究を通じた連携なども行われている。Moore 氏によると、複数機関による連携が国際戦略では不可欠だという。それぞれの機関が持つ強みをうまく導き出すことにより、全てのものにとって利益がある。さらに、一度だけのやりとりで終わるのではなく、長期にわたる連携が不可欠だという。




海外の大学との大学間協定締結について

Alejandra Vicencio, International Partnerships Manager, International Development

ノーサンブリア大学において、国際連携を担当する組織は相互に関連する 3 つの組織に大別できる。

- International Development は、協定、海外派遣・交換留学、留学エージェント対応を担当
- 各学部では、連携事業とエラスムスプログラムによる交流を担当
- Academic Quality は、国際教育活動を担当

大学間協定を締結する手続きは、まず、国際担当の副学部長職が海外の相手校を訪れ、学術的關係を作るところから始まる。協力協定を結ぶことになった場合、相手校から正式な文書による要請があり、事務的な手続きを開始する。International Development は、本学における事務手続きを一括して取り扱い、統一様式の維持、内容の精査を行う。また、協定書に双方の大学のサインを得る手続きも担当している。



海外派遣留学増加に向けた戦略について

Andy Garton, Study Abroad and Exchanges Coordinator

卒業後の就職活動などでも留学経験が有利に働くことがあるため、学期・1年単位の留学を学生に勧めている。海外派遣留学増加のためには、最新の正しい情報を学生に提供が必要だと考えたため、数年前にウェブサイトを刷新し、様々なデバイスからアクセス可能な留学情報サイトを作成した。写真やリンクを多用し、実際に留学した者にもウェブサイト上に経験談を書いてもらい、留学希望者にとって有用な情報が得られるようになっている。また、従来必要だった紙の書類での手続きを削減する仕組みを備えたウェブサイトは、留学者の増加、業務の簡略化に大きく寄与している。

派遣留学を増加させるために、学習者とその家族向けに Applicant Visit Day（いわゆる Information Day）を行っている。昨年度の実施では約 50 名集まり、日本を留学先として希望する者も多かったという。Applicant Visit Day では、留学希望者に留学先等の選択肢や詳細の情報を提供している。

また、派遣先の学生にもノーサンブリア大学に来てもらうために、派遣される留学生に Student Ambassador になってもらい、ニューカッスル市での生活や大学について積極的に広める活動を行っている。また、Student Ambassador となった学生は、ノーサンブリア大学に戻った際にも、経験談について発表する機会を設け、派遣留学生数の増加を目指している。そして、学部・プログラムのカリキュラム内にも留学を取り入れ、派遣留学生を増加させている。

質疑応答

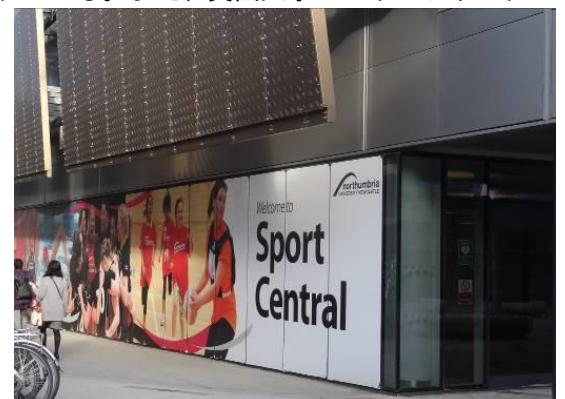
日本側からの参加者から、どのようにすれば英国の学生が日本に留学するようになるかという質問があった。その質問に対して、ノーサンブリア大学からは、ひとつではなく、多様な留学の形態を提供することが一つの鍵になると述べていた。1 学期や 1 年間の授業履修を目的にした留学だけではなく、短期プログラムの提供や調査研究のための大学院生の受け入れ、インターンシップの提供などをすることにより、より多くの留学生が英国から日本へ行きやすくなるという。また、学生や教員の受入・派遣だけではなく、事務職員も相互に送り合うことも重要だと述べていた。事務職員が互いに情報を共有することにより、より大学環境の充実が図れるようになったとヨーロッパ内での連携について紹介しながら述べていた。

ノーサンブリア大学のスポーツとその国際化施策における役割

Katy Storie, Competitions Manager

ノーサンブリア大学の Sport Central は約 5 年前、3400 万ポンドを投資して設立された英国屈指のスポーツ施設である。Times Higher Education Student Experience Survey 2014 では、英国第 5 位のスポーツ施設と評価されたほか、Daily Telegraph 2015 でスポーツ分野に関して英国第 10 位、英国大学リーグ British Universities & Colleges Sport (BUCS) 2014 ではスポーツ分野で最も進歩した大学と評価されている。また、英国大学のスポーツリーグである BUCS National League(2013-14, 2014-15)では、第 8 位にランキングしており、この順位を、3 年以内に 5 位、5 年以内に 3 位まで引き上げることを目標にしている。

学生のスポーツ活動には 2 種類あり、それぞれ Club Northumbria および Team Northumbria と呼ばれる。Club Northumbria は初心者からでも参加できる活動で、約 2,500 名の学生が様々なチームに所属している。また、単にスポーツを楽しむだけではなく、大学のボランティアプログラムに参加する学生も現在約 300 名いる。Club Northumbria や Team Northumbria のボランティアをしている学生もいるが、その多くはコミュニティプログラム、すなわち、子供向けのキャンプやスポーツアカデミー、スポーツメディアなどでボラ



ンティアとして活動している。ボランティアは無償だが、彼らのスキルを鍛え、スポーツ科学、コンディショニング、パフォーマンス分析などの分野でチームをサポートする有償(最大2,000ポンド)のインターンシップ生、さらにはスタッフへとステップアップしていくことも可能である。一方、Team Northumbriaは大学の代表として選ばれた約1,100名(24スポーツ)の学生たちが所属する活動で、BUCSで他大学との試合を行う。中でも、バレーボールやネットボールなど非常にレベルの高いいくつかのチームは、他大学のみならず、シニアチームやナショナルチームと戦うこともある。

Team Northumbriaの選手に配布されるガイドブックには、Athlete Agreementやコミュニケーションガイドラインなどが記載されており、選手たちに大学の代表としての自覚をもった行動を促している。選手たちへのサポートとしては、コーチング、理学療法、メディカルサービス、コンディショニング、パフォーマンス分析に加え、アンチドーピングやキャリアガイダンスについてなど様々なワークショップが提供されている。さらに、選手のレベルに応じて、ゴールド、シルバー、ブロンズと大きく3段階に分けられた奨学金も給付される。最も評価の高いゴールドには、インターナショナルレベルまたはナショナルレベルの選手が選ばれ、学費や生活費、試合のための旅費などが免除される。以下、シルバーでは年間最大3,000ポンドの奨学金が与えられ、ブロンズではジムのメンバーシップなどあらゆるスポーツサービスにかかる費用が免除される。

留学生獲得のためのマーケットとしては、オーストラリア・ニュージーランド(近年の授業料高騰のため)、香港(英国への留学率が非常に高いため)、カナダ(student mobilityが高くスポーツへの関心も高いため、またYouth Mobility Visaが認められているため)、中央・南アメリカ(Independent Schoolのネットワークを通じて)等を重点地域にしている。また、交換留学パートナーシップの発展にも注力している。

スポーツセンター見学ツアー

プール、アリーナ(3,000席)、スポーツホール(4面)、フィットネスセンター(150台)、スプリットトラック、ゴルフシミュレーター、スカッシュコート、クライミングウォールなど、様々なスポーツのための設備が整えられた施設内を見学した。ここでは1週間に約60のグループエクササイズクラスも開かれており、学生やスタッフの他、一般市民も施設を使用するためのメンバーシップを得ることができる。

また、見学したSport Central以外にも、フィットネスセンターやサッカー場のあるCoach Laneと、ラグビー、サッカー、ラクロスなどのためのピッチがあるBullocksteadsという2つの施設を有しており、スポーツのための環境が非常に整っている。



4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取組み・方針等について

ノーサンブリア大学では、大学内の留学を希望する学生向けにホームページ「Move On」を開設している。そのホームページでは、国や学部、大学・大学院レベル別に検索をかけ、学生個々にとって適切なプログラムを学生自身が検索することができる。また、こちらのホームページから学生自身が留学の応募をするようになり、手続きが大幅に簡略化されたという。

ノーサンブリア大学では、スポーツを通じた国際化に力を入れる中、スポーツ施設のハード面の充実のみならず、キャリアガイダンスやソーシャルメディアの使用方法についてのワークショップ、ライフサポートのためのスタッフの設置など内面的な教育・サポートが組織的に行われている。



5. 報告者所感

スポーツを通じた国際交流というのは私の所属する大学でも盛んに行われているが、個々の教員や競技ごとに行われており、大学の国際化という文脈で語られることは少ないように思う。しかし、スポーツは大学の国内的・国際的 reputation を高めることや、在学生、教職員、卒業生らの帰属意識を高めることに大いに貢献するものであると改めて実感した。まずは今すでに行っている国際交流の取り組みへの参加者を増やす仕組みを大学として考え、発展させていくことが必要であると感じた。また、国際化を推進するにあたっては、学生交流に加え、教員及び職員の交流も併せて推進、継続していくことが重要だと感じた。

(報告担当：瀬尾、武田、赤松)

1. 大学の概略

ニューカッスル大学は、1834年に医学部(School of Medicine and Surgery)が設立され、1871年に物理学の教育を提供するための Armstrong College を設立。ラッセル・グループの構成校でもあり、現在ニューカッスル大学は医学、科学、工学、社会学、人文学に関連する広範囲の研究を行っており、特に最も強い研究分野としては、英語学、地理学、建築計画学、文化・メディア学、土木工学、数理学、臨床医学、生物学、心理学、精神医学、神経科学、肝臓医学。

2009年には Singapore Institute of Technology と提携しシンガポールキャンパスを開校。2011年には海外において英国の大学では初となる医学部キャンパスをマレーシアに開校。REF (Research Excellence Framework) 2014では研究力において英国154大学中16位にランクイン。また、ニューカッスルはTHE社の英国における学生生活満足度調査で1位を獲得した人気の学生都市である。



Armstrong Building

2. 訪問スケジュール

14:30 歓迎の挨拶(Eric Cross, Dean of Cultural Affairs)

14:45 ニューカッスル大学の国際戦略(Alison Tate, Partnerships Manager and Lesley Jackson, Internationalisation Manager)

15:15 言語教材センターへようこそ (Andrew Grenfell and Claire Johnson, Language Resource Centre)

16:15 休憩

16:30 研究連携活動の紹介

“Finding Funding for UK/Japan Research Collaborations” (Elisa Lawson, EU and International Research Funding Team)

“UK-Japan research collaboration case study: Past, Present and Future” (Adam Brandt, Lecturer, Applied Linguistics)

“Collaborating Across Cultures: The 2013 RENKEI Researcher Development School in Bristol and Kyoto” (Robin Humphreym, Reader, and Director of Postgraduate Research Training)

3. 発表要旨

Language Resource Centre の紹介

Andrew Grenfell and Claire Johnson, Language Resource Centre

“Language Resource Centre”(以下、「LRC」)は、言語や異文化コミュニケーションを学ぼうとするすべての学生に開かれた施設で、同種のなかで世界一の施設となることをミッションとする。さまざまな言語に対応した図書、教材、辞書、CDやDVD、学習ソフトウェアやインターネット環境などを提供し、また専門の教職員を擁している。プレゼンテーションにおいては、LRCの設備や取組みの紹介のほか、日本語学習ソフトの実演も行われた。

LRCは単に言語教育・学習の場であるというだけでなく、学生ネットワークの構築の場でもある。その実践の好例が“Tandem Learning”だ。これは、ある言語を学習したい学生とその言語を得意とする学生がペアになって、お互いに言語や文化を学び合うという制度である。この制度はNCUにおいて定評があるようで、LRC内の掲示板“Tandem Notice Board”には、学習したい言語ごとに申込書が所狭しと貼られていた。

日本に留学した経験を持つ学生 2 名、日本から留学している学生 1 名、そして日本語セクションの教員 1 名からのプレゼンテーションも聴いた。学生からは留学を通じて経験した困難や成長、友人との出会いや将来の展望が、教員からは地域や学外の機関を巻き込んだ日本との交流の実例などが語られた。



Tandem Notice Board

研究連携活動の紹介

Elisa Lawson, EU and International Research Funding Team

EU and International Research Funding Team の Dr. Elisa Lawson より、研究者交流、フェローシップ、交流のきっかけとなるイベント(ワークショップ等)、大きな研究プロジェクトに対する支援ファンドについて、カテゴリー毎に JSPS 等のプログラムとそれらを活用した具体的な日本の大学との交流活動について紹介があった。同チームは、以上のようなファンドの周知やイベント開催、研究者への個々の相談対応、連携パートナーやファンド組織との橋渡し、さらには新たなファンドの開拓などを実践している。

これまでの研究実績として、JSPS postdoctoral fellow を活用した関西大学との応用言語学における共同研究と異文化コミュニケーションとエンジニアリング教育をテーマとした東京大学の研究チームとの共同研究について紹介があった。また、今後の活動として JSPS London Symposium/Seminar Scheme へ申請中の来年 9 月予定のセミナーについて紹介があった。本セミナーは、英国と日本が協働して国際化を推進する取組みを考察し、日英間の研究ネットワークを強化・拡大することを目的としている。



Dr. Humphrey による RENKEI の紹介

最後に、Dr. Robin Humphrey より、日英の 10 大学が参加する RENKEI School について紹介があった。本プログラムにおいては、①異分野・異文化間研究を先導する将来の研究リーダーの養成、②参加者間で具体的な連携の促進、③日英の持続可能な研究者ネットワークの構築を目的としており、プリストルと京都に若手研究者が集い、都市の持続力と復元力をテーマに、それぞれの文化を体験しながら、ディスカッションやグループワークを実施している。

4. 報告者所感

[Language Resource Centre が果たす役割について]

言語学習は、留学前であっても留学中であっても、長期間に亘る必須の課題であるといえる。そのことを踏まえると、留学生や留学を考えている学生にとって、施設・設備、教材、人材、そしてシステムを整備して言語学習・教育を支援する LRC の存在は、大きな助けとなるはずだ。そしてまた、教養教育や生涯教育、文化交流といった、留学とは直接関係のない場面でも重要な役割を果たすと思われる。Mr. Grenfell は「学生こそが



LRC の入り口



大学の最大の資源だ」と繰り返していたが、その発言のとおり、LRC は学生の成長を非常に大切に考えていると感じられた。

日本の大学でもこの試みを参考にし、留学生と日本の学生が言葉を交わし、協働していくような仕組みや環境をコーディネートする拠点を作ることができれば、そこから今度は学生たちによって興味深い活動が自然と生まれてくるだろう。

[Newcastle University との今後の連携について]

ニューカッスル・アポン・タイン市は、日本の企業も多く、比較的日本に近い存在である地域であるので、学生派遣の候補として期待される場所である。さらに、ニューカッスル大学は、研究力が高く、日本にも共通する高齢化社会や持続可能社会の研究を推進しており、研究面の連携先としても魅力的であるが、今回のプレゼンテーションにおいて、共同研究を開始・推進するうえで欠かせない研究サポートファンドや、日本の大学との共同研究等の実践例が紹介されたことにより、具体的な連携を検討するための有効な情報を得ることができた。

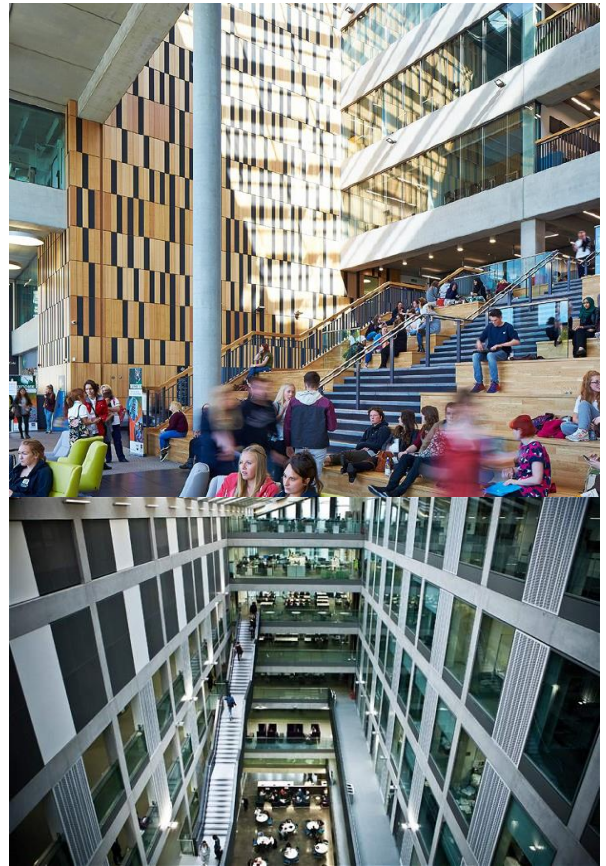
(報告担当: 日笠、牧野、木村)

1. 大学の概略

マンチェスター・メトロポリタン大学 (MMU) は、学部生 25,354 名、大学院生 5,374 名 (2014 年度) を有し、英国では最大規模の大学の一つである。留学生は約 1,600 名 (120 を超える国籍) 在籍している。学部は 7 つあり (アートデザイン学部、コミュニティ研究・法学・教育学部、MMU Cheshire 学部、食物・服飾・ホスピタリティ・マネジメント学部、人文科学・社会科学学部、ビジネススクール、理工学部)、400 を超えるコースがある。

MMU は Complete University Guide 2015 において 11 の分野で UK の上位 20 位にランクされており、ビジネススクールが AMBA、CIMA、ACCA、AACSB などの認証を得ていることから学問上の卓越性が明らかである。MMU の特徴としては、まず、職業教育に重点を置いている点が挙げられる。'The University for World Class Professionals' と位置付け、多くのコースに 1 年間のワークプレースメント (インターンシップ) が組み込まれている。その成果として卒業生の 9 割がストレートで職に就く、あるいは 6 か月以内に進学先が決定している。

研究においては特にアート・デザイン分野と保健分野に強みを有する (それぞれ、REF2014 において 84 機関中 6 位、および 94 機関中 12 位)。国際化に関しては「Research & Knowledge Exchange at MMU」というビジョンを全学で共有し精力的に取り組んでいる。また、2014 年以降 3 億 5000 万ポンドをかけて教育環境の整備を進めてきており、高い水準の教育を受けることができることも特筆すべき点である。



2. 訪問スケジュール

- 12 : 00 ネットワーキングランチ
- 13 : 00 歓迎の挨拶、マンチェスター大学の紹介 (Myszka Guzkowska, Deputy Vice Chancellor)
- 13 : 30 国際化への取組みと展開 (日本への戦略を含む) (Stephen Parkin, Director, International Office)
- 14 : 00 大学のブランディング、レピュテーションマネジメントおよび PR (Gary Hughes, Director, Marketing, Communications and Development)
- 14 : 30 英国における国境を越えた教育への取組み (Ian Jones, Head, International Partnerships)
- 15 : 00 休憩
- 15 : 30 学生交流～学生の受け入れと派遣についての取組み (Natalie Cunningham, Head of Student Mobility, James Rothwell, Study Abroad & Exchanges Manager)
- 16 : 00 「研究と知識の交換」への取組み (Michael Daw, Business Manager)
- 16 : 30 サマースクールの取組み (Andy Harris, Faculty of Humanities, Languages and Social Science)



3. 発表要旨

国際化への取組みと展開（日本への戦略を含む）

Development and Implementation of International Strategy, Including Japan Strategy

Stephen Parkin, Director, International Office

4つの概要（英国の大学の国際化、MMUにおける国際化の優先課題・基本方針、具体的な国際化の手法、日本との関係）について発表があった。

(1) 英国では経済的・政治的な変動により、現在政府からの予算配分の縮減が進んでおり、資金獲得が課題である。過去も今現在も、英国の大学において留学生が支払う授業料は重要な収入源である。定員拡大により、学生数の増大を図っており、ここ5年は特に国際化に重点をおいた学生活動や支援に注力している。政府の高等教育に対するサポートが財政補助や法的規制などから大学自身の力を高めるためのものに変ってきており、より個々の大学への責任が大きくなっている。なお、大学学術ランキングが補助金配分に影響するため、評判に一喜一憂しがちだが、学術研究や教育の創出に重点を置くべきである。

(2) MMUの国際化戦略の優先課題は、研究、TNE（Transnational Education）、Student Experience、学生の獲得の4つである。研究では、共著論文や出版物の引用回数の重要性についてトレーニングを行っている。TNEについてはMMUの学位を世界に発信させるよい機会であり、Student Experienceは、学生の家庭・財政事情が多様化しており、様々なタイプの国際化経験を提供する工夫が必要である。また、国際化戦略の基本方針は、大学の強みやAcademic Priorityに重点を置き、国際化はゴールではなく、大学自身の力を高め、教育や研究の戦略・ビジョンをサポートするもので、Additional workでないことを念頭におく。持続可能なパートナーを通じて、相互利益、相手地域特有の環境・経済・規制を学ぶことで、強く深い絆となり、より国際化の発展へとつながる。

(3) MMUは、2014年に新たな国際化戦略を策定し、国際化の大規模な再編成を行い大きな変化と成功を遂げたが、そこに至るまでに次のようなことを行った。ワークショップを開催し、ステークホルダーやキーパーソンに国際化の重要性や施策の詳細を説明、理解を促し、大学全体で協議し、大学役員や執行部会への働きかけ、各部局にもKPI（重要業務評価指標）の設置、学内PRを繰り返した。また組織改革として、国際化オフィスを14名から25名に拡大し、中国やインドなどの人材を登用した。各部局に国際担当のAssociate Dean、Department Champion-Keyの役割を設けた。執行部会の直下に国際化対策委員会を置きKPIの報告・確認を行っている。意識改革としてFD/SDを行い、成功事例に対しては表彰を行うとともに情報共有を図っている。

(4) 日本との交流については、長崎大学と創価大学で交流協定がある。また、キャンパス内では、日本人留学生が日本語教育をするなどのStudy Tourを開催しているほか、NCUK（Northern Consortium UK 大学院準備コースを検討する組織）のメンバーとしての繋がりがある他、共同研究（環境学、バイオメディカルサイエンス分野）を行っている。

大学のブランディング、レピュテーションマネジメントおよびPR

University Branding, Reputation Management and PR

Gary Hughes, Director, Marketing, Communications and Development

ブランディング戦略について、レピュテーションマネジメントあるいはPR戦略の観点から説明があった。特に、メディア上での大学に関する情報をいかにマネジメントするかという点が強調されていた。大学に関連する情報といえば、大学が有する公式のホームページや、ウェブ掲示板、情報誌などの媒体を通じて発信されるものというイメージが強いが、MMUではそれらに加え、Twitter、Facebook、Linked in（ビジネス特化型ソーシャルネットワーキングサービス）、mmutube（MMUに関連するコンテンツに限定した動画配信サービス）といったソーシャルネッ



トワークサービス（以降 SNS）をはじめとした外部ネットワークについてもマネジメントの対象としていることが特徴である。

発表の中で紹介された取組みをいくつか紹介する。まず、MMU のホームページ上で、専門分野をキーにして MMU に在籍する教員（専門家）を検索できるシステムである。このシステムにおいて特筆すべき点は、検索の結果得られた専門家のリストに「最近メディアに取り上げられた話題、記事」という項目が付されており、関連する外部メディアへリンクが繋がれているというものである。このように、単に教員の専門性をローカルで管理するのではなく、外部メディアへのリンクによって、リアルタイムで信頼性を保証し、レピュテーションを高める努力を行っている。

また、出版物、キャンペーン、募集など広報に関わるアクションを、大学内の各部局（学部、センターなど）が行うイベントの計画と併せて計画している。これにより、どのような情報をどこでどのような形で発信するのかという緻密な計画を立てることができ、効果的な情報発信を実現している。さらに「情報を発信して終わり」ではなく、それらについて媒体価値を算出し、その効果をフィードバックすることで情報発信の PDCA がマネジメントされている。Twitter のリアルタイム監視も興味深い取組みであるといえる。これは、TweetDeck という Twitter クライアントを利用したものであり、大学公式の Twitter アカウントは勿論のこと、「MMU」をワードとして含む Tweet を常に監視することで、自大学に関連する情報が SNS 上でどのように動いているかをリアルタイムで把握できるというものである。

英国における国境を越えた教育への取組み

International Teaching Partnerships (TNE)

Ian Jones, Head, International Partnerships

TNE（※1）の促進について説明があった。3.1「国際化への取組みと展開」でも説明があった通り、TNE の取組みは、MMU が掲げる 4 つの国際戦略のうち、優先課題の 1 つとして位置づけられている。MMU における TNE を進める主な目的は下記の 3 つである。

- (1) 高等教育の国際市場における MMU の認知度を向上させること
- (2) 「研究・知識の交換（※2）」あるいは「学生への経験・機会の提供」促進のためのプラットフォームの確立
- (3) 政府と教育機関の関係が構築、保たれるように援助をする。さらなる大学での教育活動をサポートするために必要な資金の流れを保証させる

MMU では TNE を Franchise 型、Validation 型、Remote Delivery (Flying Faculty) 型、Joint/Dual Degree 型の 4 パターンに分類し、協定先との間で発生する制約条件にフレキシブルに対応できるようにしている。具体的には、TNE に必要なプロセスまたは役割を下表のようにカテゴライズし、MMU と協定先のどちらがそれらを担うのかという観点で分類している。特筆すべき点は、いずれの型においても最終的な保証（質保証と学位授与）を MMU が行っている点であり、ここに上記目的が明確に現れているといえよう。

表 1 MMU における TNE の種類

役割	Franchise	Validation	Remote Delivery (Flying Faculty)	Joint/Dual Degree
カリキュラムデザインと知的財産	MMU	協定先	MMU	両大学
教育	協定先	協定先	MMU	両大学
評価	協定先	協定先	MMU	両大学
教育を行う場所	協定先	協定先	協定先	フレキシブル
質の保証	MMU	MMU	MMU	両大学
学位授与	MMU	MMU	MMU	Dual: 両大学が個別に授与 Joint: 両大学共同で 1 学位を授与



なお、現在、MMUのTNEにおける重点パートナーは、フランス、オーストリア、スイス、ルーマニア、ロシア、香港、ヴァージン諸島である。今後は、インド、スリランカ、中国、香港、マレーシア、ギリシャ、ナイジェリア、ドバイなどを開拓していく予定である。本発表においては、MMUがTNEのパートナーに求める条件についても明示された。具体的には、強みのある分野を有しているかどうか、強固なアカデミックビジョンを有しているか、安定的な財政基盤があるか、レピュテーションなどをパートナー選定基準として設けている。

(※1) 機関が所在する国とは異なる国の学生に対して提供される学位・単位付与に繋がる高等教育学習であり、MMUに限らず英国の多くの高等教育機関が、国際化を進めるキーコンテンツとして位置づけ取り組んでいる。

(※2) 3.5 Research & Knowledge Exchange at MMU を参照

学生交流～学生の受け入れと派遣についての取り組み

Student Exchange – Operations, Initiatives for Inbound & Outbound Mobility

Natalie Cunningham, Head of Student Mobility

James Rothwell, Study Abroad & Exchanges Manager

国際化の優先課題である、Student Experienceの意義について、具体的にはカリキュラムの中に、また特別カリキュラムとして国際理解やグローバルな要素を組み込むことで、異文化理解や適応力、グローバルな価値観や展望をもち、将来の国内外でのキャリア形成のために幅広い知識を得、複雑化・変動しつつある世界で活躍できる競争力やコミュニケーション能力をもった人材の育成を目指すものであると前置きがあり、今回は、学生派遣の取り組みを中心に発表があった。

(1) 学生派遣の状況は、2014–2015年では、エラスムス地域が178人（Study 134人、Work 43人）、ヨーロッパ以外が157人（Study 117人、Work 40人）とヨーロッパ以外への希望者は多い。ただ、2015–2016年のヨーロッパ以外の留学希望者のうち交換留学ができた学生は、50%弱であり、（希望者120人に対し56人）、新しいパートナーの開拓が急務である。

(2) 学生へ提供している派遣プログラムには、通常の1年留学や1学期留学制度の他、最近では様々な背景をもつ学生のニーズに合うよう、短期間の留学・国際体験（サマープログラム、Study Tour）の拡大・開拓に力をいれている。また、海外インターンシップは、海外経験と就業体験を1つのパッケージで行うことができ、有意義なものである。さらには、Virtual Mobility（スカイプなどの通信機器を使い、海外に行かずに交流を図るもの）などの紹介があった。

(3) 学生交流を推進する部署は、本部に4名（Head 1名、Manager 2人（派遣と受け入れ各1名）、Administrator 1名）、各部局に国際担当のAssociate Deanを置き（部局により Principle Lecture が補佐）、部局・専攻にそれぞれ留学コーディネーターを置いている。さらに、インターンシップのサポート、アカデミックサービスも部局毎に行っている。

(4) 英国内の大学ネットワーク BUTEX（英国の高等教育機関で組織され、国際化について検討・意見交換する組織）や、HEURO（ヨーロッパとの交流に特化した英国大学メンバーで構成されている組織）、ブリティッシュ・カウンシルなどを活用して、情報収集・情報共有を行っている。

(5) その他取り組み課題としては、学生の留学資金確保のため、内部と外部の資金源を調達する、履修制限を最小限にする、渡航の事前・渡航中の語学面でのサポートなど、留学への不安を軽減し、留学しやすい条件を整えることである。



「研究と知識の交換」への取り組み

Research & Knowledge Exchange at MMU

Michael Daw, Business Manager

Michael Daw 氏 (Business Manager) より、MMU における研究と知識の交換についての説明があった。1990 年代の MMU は、研究よりも教育に重点を置いていたため、大学ランキングは高くはなかった。しかし 2000 年以降、研究と知識の移転に惜しみない努力を注いだ結果、昨年は主に以下の 5 つの成果が得られた。

(1) 連携研究、応用研究、コンサルタント業、企業の従業員養成、施設の提供、欧州連合の資金による地域再生事業、知的財産により 2013 年から翌年までの MMU の総収入額に 15% の増大が見られ、1620 万ポンドの収入があった。

(2) 英国行政機関が行う REF (Research Excellent Framework) による審査で、研究のアウトプット評価、研究が国の政策、社会、経済に与えた影響を計るインパクト評価、研究環境に対する評価の結果、65% の研究が世界トップレベルまたは国際的に優れていると評価され、また 85% の研究のインパクト評価が世界トップレベルまたは国際的に優れているとされた。

(3) 世界トップレベルまたは国際的に優れていると評価された研究者数が 120 名から 203 名へと 7 割増加した。

(4) Times Higher Table of Excellence 世界大学ランキングで英国 128 大学中 12 位ランクアップし、66 位となった。2020 年までに英国大学の中でトップ 50 位に入ることを目標としている。

(5) Knowledge Transfer Partnership (KTP) と呼ばれる産学連携取り組み制度により、MMU では企業で働く社会人を対象に実践的な専門教育を行い、学部課程レベルの Foundation Degree や学士号を授与している。現在 20 の企業と提携しており、この数は英国の大学において 6 番目に多い数である。

サマースクールの取り組み

Summer School at MMU

Andy Harris, Faculty of Humanities, Languages and Social Science (HLSS)

応用言語学、英語教授法、大学経営学を専門とする Andy Harris 博士が MMU で開講しているサマースクールについて下記の通り 6 項目に分けて説明をした。

(1) マンチェスターに滞在することの魅力は？

マンチェスターはサッカーチームが世界的に有名であり、多文化都市である。ロンドンと違い、都市がコンパクトであり、市内移動に時間が掛からない。マンチェスターの住民はフレンドリーであり、住みやすい都市である。


(2) サマースクールの種類

(i) 複数の学部によるサマースクール

複数の学部が開講しているサマープログラムは学生が自分の専攻と異なる分野でも興味を持って学ぶことができるよう、幅広い視野を持って専門科目を英語で教え、さらに文化体験と社会経験をさせている。

(ii) 学科に特化したプログラム

上記の複数の学部によるサマースクールよりも学生の専門性を重視しているため、学生が自分の専攻に特化した科目を英語で勉強するだけでなく、より実践的な学習ができるプログラムを提供している。



(iii) 英語教育

学生の英語力、学習目的、滞在期間等に合わせて英語学習のプログラムを個別に作り、学生はそのプログラムに沿って英語を学習する。多くの学生を一度に受け入れることも可能である。

(3) サマースクールの概要

学生は午前授業、講演、チュートリアルを受講し、午後に文化的訪問をする。午前と午後の内容が有機的に連携するようプログラムされている。例えば午前授業でジャーナリズムについて学んだ日は午後 BBC を訪問して BBC 職員と交流する。夕方はレストラン、ポーリング、映画館等での親睦会に参加し、週末は日帰り旅行へ出かける。

(4) 例: HLLS International Summer School 2016

複数の学部が開講しているプログラムの例は以下の通りである。「マンチェスターの歴史」、「英国政府の仕組み」、「音楽、ファッションと若者の文化」、「マルチメディア・ジャーナリズム」、「国際関係とグローバル・コミュニケーション」、「ゴシック様式のマンチェスター」、「多文化な英国」、「異文化コミュニケーションと言語学」、「サッカーと英国文化」。

(5) 学生にとってのメリット

学生には以下に示すメリットがある。(i) 留学体験ができる。(ii) 世界中の学生と交流できる。(iii) 自信を身につけ、異文化コミュニケーション能力を上げる。(iv) 専門科目の学習スキルを構築する。(v) 学習内容、設備、学習機会がすべて最新である。(vi) 「雇われうる能力」に繋がる。(vii) 短期間に効率よく学習することができる。(viii) 治安がよく、万全な指導体制である。

(6) 大学にとってのメリット

双方の大学にとっての利点は以下の通りである。(i) 交流の始まりとなる。(ii) 大学間の正式な覚書(MOU)を必要としない。(iii) 正式な交流協定締結に繋がる可能性がある。(iv) 両大学の教職員の交流に繋がる可能性がある。(v) 両大学が大学の広報誌等にサマースクール参加・受け入れについて掲載し、双方の交流を周知することができる。(vi) サマースクールでの留学が学生のさらなる留学に繋がる可能性がある。(vii) サマースクールに学生を参加させることによって留学先の施設を学生に提供することができる。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取組み・方針等について

明確な目標:

2020年までに英国大学の中でトップ50位に入るという目標を大学全体で単に共有しているだけではなく、目標を達成させるための戦略の策定と目標達成のための努力を全教職員が一丸となって行っていることに感銘を受けた。また「Research & Knowledge Exchange at MMU」のプレゼンテーションは同目標の宣言から始まり、外部の我々に周知するという徹底振りからどれだけこの目標を真剣に捉えているかが伝わってきた。

徹底した役割分担:

日本の大学では、自分の本来の任務ではない仕事がある日突然回ってきて、その仕事新たな任務となるケースが散見される。例え、それが自分の専門外の業務であっても、「関連性があるから」あるいは「経験を積ませるため」と



いう短絡的で時代に合わない理由をつけて新たな仕事が割り当てられる。一方、英国では、より効果を高めるために役割分担を明確にし、その道のプロが必ずプロの仕事をするというスタンスが見受けられた。

多様な情報発信に基づく高度なレピュテーションマネジメント：

「大学のブランディング、レピュテーションマネジメントおよび PR」において述べたように、MMU では、大学から発信する情報をマネジメントしている。このような高度なレピュテーションマネジメントは、Twitter や Facebook などの SNS を活用しているからこそ可能になると考えられる。

5. 報告者所感

マンチェスター・メトロポリタン大学に限らず今回訪問した他大学においてもそうであったが、留学政策のキーワードは「Student Experience」、「Research Quality」、「Effective Marketing」の3つであろう。英国の留学生支援政策である Prime Minister's Initiative (PMI) を背景に、各大学は、とにかく「留学生受け入れ数」を増やすことを最優先として取り組んでいるという印象を受けた。学生数を増やすためには、Student Mobility の向上が必要であり、ハードルの低い例えばサマープログラムなどの短期プログラム、派遣元の条件に合うようカスタマイズされたプログラムの充実を図るとともに、自大学の PR を積極的に行っている。今回の訪問で特に印象深かったのが、“高度なレピュテーションマネジメント”であった。前述のとおり、MMU はマーケティングを専門とするスタッフから構成される専門組織を有し、様々なメディアにおいて、自大学に関する情報がどのように発信／受信されているかをモニタリング・分析を行い、データに基づいた効果的な情報発信のあり方を追求している。おそらく、日本の大学がこのような高度なレピュテーションマネジメントを行うことは現状では極めて難しいであろう。なぜならば、日本の殆どの大学はこのような専門組織を有していないからである。この問題は、レピュテーションマネジメントに限ったことではない。例えば IR (Institutional Research) 活動においても、IR に関する高度な専門知識やスキルを有する専門組織を有する大学が少ないといった実態にも反映されているといえよう。この背景には、日本の大学組織とりわけ職員組織における「スペシャリスト養成よりもジェネラリスト養成を重視する」風潮があるからと考えられるが、日本の大学が国際化をなかなか進められず、海外大学に大きく遅れをとっている大きな理由の一つがここにあるのではないだろうか。

日本の大学が国際化を進める上で、「高度な専門組織を持つこと」は極めて重要なファクターであると感じた。これに加え、PR のための情報発信の方法についても、日本の大学は遅れていると感じた。上記 4 においても述べたように、大学が発信した情報をどのような層が、いつどの程度受信し、それに対してどのようにアクションしているかを把握しないことには効果的な PR は行えない。言い換えれば、ただ情報を発信して満足しているのが現状ではないだろうか。確かに、Twitter や Facebook などの SNS 内部では、大学公式の情報と大学の外からの情報が入り乱れるためハンドリングが難しくなる。これが、日本の大学が SNS を敬遠する理由であろう。しかし、MMU のように高度なマネジメント体制を整えることで、SNS は情報発信における強力な武器になり得るということが示されたのではないだろうか。

(報告担当：松岡、古谷、河合)

1. 大学の概略

イーストアングリア大学(UEA)は1963年設立で、52年の歴史をもつ比較的新しい大学である。ロンドンから北東へ電車で2時間の距離にある町ノリッジに位置する。キャンパスは200ヘクタールの広大な敷地に広がる。

人文科学部(Faculty of Arts and Humanities)、医学・保健学部(Faculty of Medicine and Health Science)、理工学部(Faculty of Science)、社会科学部(Faculty of Social Sciences)の4学部体制。特に強みを持つ教育研究分野として、気候変動(Climate Change)、ソーシャルワーク、文芸創作(Creative Writing)、国際開発学(International Development)、食品科学(Food Science)が挙げられる。

学生数は約15,000名で、うち20%は留学生である。

Research Excellence Framework (REF) 2014によると、UEAの70%を超える研究が、「世界を牽引する」あるいは「国際的に優れている」研究と評価されている。Times Higher Education (THE) 世界大学ランキング2015では149位。National Student Surveyによる学生満足度調査では、2005年に開始されて以来毎年、英国主要大学でトップ5(うち2013年は第1位)に入っている。

近年、UEAは国際戦略の一環として、「アメリカ合衆国、中国、インド、東南アジア」と並び「日本」を重点国として位置付けている。

2. 訪問スケジュール

【午前の部】・・・プレゼンテーション

- ① Professor Neil Ward Pro-Vice-Chancellor(副学長)からのご挨拶
- ② UEAの国際化戦略における発展と推進
- ③ UEAブランド、レピュテーションマネジメント、広報

【昼食】・・・Sainsbury Centre for Visual Arts(SCVA)内カフェにて。ビュッフェ形式。複数の丸テーブルに座席指定で分かれて歓談。訪問側と受入側の職員が交互に座れるように配置されていた。

【午後の部】

- ① キャンパスツアー・・・4グループに分かれ、図書館、カフェテリア、保健管理センター、イベントスペース、キャリアセンター、学生寮(部屋の中まで)、寮生のためのスーパーマーケット・銀行などを見て回った。各グループには学生アンバサダーが1人ずつ付き添い、ポイントごとに説明を加えていただいた。
- ② ラウンドテーブルディスカッション・・・5テーブルに班分け。ディスカッション前に、各テーブルから1人現地職員が全員の前でプレゼンテーションを行った。その後、事前プレゼンテーションの内容を膨らませる形でテーブルごとに1テーマ計5テーマについてディスカッション。終了後、各テーブルより代表者1人が議論の内容と結論を全員に向けて発表。



3. 発表要旨

イーストアングリア大学の国際戦略の展開と推進

Richard Harvey, Director of Admissions and Academic Director of Internationalisation

Karen Blackney, Head of International



UEA は、学生満足度の点において評価が高く、英国の大規模研究型大学 24 校で構成するラッセル・グループと比較しても非常に高い。また、研究面においても、研究成果の質の点で英国内 10 位と、非常に高いパフォーマンスを有している。なお、UEA が位置するノリッジは、論文引用数から見ると、オックスブリッジ、ロンドンに次ぐ重要な科学の拠点であると言える。

その一方、評判指標(Reputation)の点では総合 200 位台と、学生満足度及び研究パフォーマンスに比して低く、このギャップを是正することが UEA にとっての課題である。

評判指標は、研究力の高さにより引き上げられる。研究力を国際比較すると、英国は国の大きさに比し、引用数が非常に多くインパクトの高い研究業績を多く出しており、その中でも特に国際共著論文のインパクトが高い。これらのことから、優れた国際的コラボレーターとの協力関係構築を重要視している。

UEA では、国際化戦略として Research、Reputation 及び Revenue の 3Rs を掲げている。これは、優れた研究実績が評判指標を上げ、その評判が学生を誘引し、その結果が収入の増加に繋がるという考え方に基づくものである。また、米国、中国、インド、東南アジア及び日本の 5 つの地域を戦略上の最優先地域と位置付け、特に日本はその学術的影響力の強さから戦略の要所と捉えており、日本の大学とのコラボレーションにとっても強い興味を持っている。

UEA はここ数年、新しい学長を迎え国際化戦略を立てながら、国際化の発展と推進に力を入れている。約 20 か国で留学生リクルートメントを行っているが、大学のレピュテーションは学生にとって一番強いブランド力であると実感している。

国際化促進を全学的に行うには大変苦労しているが、次に示すようなことを実践しており、地道な働きかけではあるが、UEA は今、急速に国際化を推進している。

- すべての学生に国際化を意識させるための国際化ビジョンを表明
(例: 国際的なネットワークを強める、国際的な問題を解決する等)
- 大学内の委員会、主体的な学長室といったトップレベルでの国際化に向けた協力体制
- キャンパスを超えた学内の国際化に向けた協力体制
- 国内外の協定校と交換留学の成功例等の共有
- 学生間での国際交流機会促進
(例: 学生団体、アンバサダー制度、新入生の“get to know”グループ等、学生同士で国際交流についてディスカッションを行う、留学経験談を話す等)
- 国際連合協議や国際セミナーの実施
- 国際プログラムセンターの基盤整備
- 国際化の目標達成祝賀会開催


イーストアングリア大学のブランド、レピュテーションマネジメント、広報

Angelina Bingley, Director of Admissions, Recruitment and Marketing

Giles Whattam, Head of Strategic Marketing

近年、大学のブランド化が大学評価で重視されるようになってきた。「ブランド」自体は、大学が自身で作上げるものではなく、周りが形作るものである。しかし、ブランド力を高めるために、大学の独自性をどのようにアピールするかを工夫することはできる。イギリスの高等教育機関においては、どの大学にも素晴らしいキャンパスやスポーツ施設があり、学生自身も良い経験をしている。しかし、そのような多くの素晴らしい大学がある中で、UEA がどのような独自性・独創性を打ち出すことができるのかが重要である。

UEA では、“Be confident,” “Be yourself,” “Be different” という基本概念に基づき、広報活動を行っている。すなわち、UEA が行う「他とは異なる」様々な活動を自らの経験として「主体的」に、「自信」を持って発信することにより、独自性・独創性をアピールし、他大学との差別化を図ることで自身のブランド力を向上させる、ということである。そして、UEA では、型にはまらない(unconventional)教育や研究を推進することで独自性・独創性を発揮し、型にはまらない優秀な人材(unconventionally brilliance)を育成している。



また、UEA について説明する際、これまでは教育・研究・施設等を全て網羅する形で話していたが、大学の uniqueness を出すために、近年では innovative teaching, innovative research 等に焦点を当てて説明している。更に、聞き手を巻き込むため、事実や数字のみに頼って説明するのではなく、UAE がいかにイノベティブなのか、チャレンジングなのかを物語風の「ストーリー」として説明し、質問を投げかけるようにしている。大学では異なる分野の様々な活動が展開されているため、柔軟に PR していくことが求められている。なお、UEA には専属のサイエンスライターがおり、分野ごとに担当を分けて対応している。

昨年、UEA に関する 9,207 件の報道がなされた。このうち、4,578 件はイギリス国内(ガーディアンやタイムズ等)、残りの 4,629 件は海外で報道されたものだった。また、これらの報道のうち、後ろ向きだったものはわずか 1%のみであり、92%は好意的な報道がなされた。そして、この報道は 2,600 万ポンドに匹敵する経済効果を UEA にもたらした。

ラウンドテーブルディスカッション

※UEA 担当者が参加したテーブルの議論を以下まとめた。

協定締結 Partnership agreement

海外との協定を結ぶ上での障害について、日本からの参加大学および UEA との間で以下の通り問題点の共有がなされた。

対面ではなくメールのみでのコミュニケーションとなるため、言葉の違いによる齟齬、やり取りの長期化が発生する。

どちらのテンプレートを使うべきかという議論が発生する。また、法令や知的財産取り扱いなどの相違から、条文の調整に何度もやり取りが発生し、手続きが長期化する。なお、UEA では大学の必須条件を満たしていればテンプレートを問わない。

協定締結のために行う審査や書面の取り交わしなど、すべてを完成させるために長い時間が(2 年間くらい)かかる。特に日本側では、所要の承認手続きのために協定書の和訳を用意する必要があり、翻訳にかかるコストや、用語和訳の正確性などに苦慮している。なお、UEA ではすべての協定書を学長がサインするため、その前に協定書の内容を完璧にしておくはといけない。

交流を持続的に保つのがとても大切だが、協定の多くが世話教員からの提案によるボトムアップ型であることから、当該教員が退官した後、交流が休眠状態になってしまうなど、交流の持続性確保が困難となる場合が少なくない。

また、協定締結の承認手続きにおいては、相手方の世界大学ランキングが重視されること多いこと、また日本側はやや官僚的な傾向が見られるとの意見があった。

留学生支援 Student Support

学生の海外派遣・留学生の受入れを行う際の効果的なサポートのあり方について議論し、以下のとおり共通認識を得た。

留学生がリラックスして大学生活を送ることができるよう、受入大学においてウェルカムイベントを開催すると良い。その際、学生同士の交流を促進するのみならず、現地の学生との交流も促進したほうが効果的である。

チューター制度等、留学生が現地の学生と友達になる制度を設けると良い。より親密な関係を築き上げることも可能となり、生涯の友にもなり得る。

留学前と留学後のギャップをなくすよう努める必要がある。同窓生に協力してもらっても良い。

また、学生が留学に期待することの大きな要素の一つとして、現地の学生との交流があげられるため、local students と international students が交流する機会を担保することも重要であるという共通認識を得た。



海外への PR 戦略 Communication-Promotion Overseas

日本からイギリスへ、イギリスから日本へ、双方向の PR 戦略について、以下のとおり共通認識を得た。世界大学ランキングが留学生を引きつける要因になっている。

ウェブサイトは PR の強力なツールだが、日本語だけあるいは英語だけでしか用意しないのはもったいない。記載言語の拡充をはかるべき。留学経験者が在学生に向かって生の体験談を語ることも重要。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取組み・方針等について

自大学、国内並びに世界各地における研究分野毎の強みを分析した上で国際連携の最優先地域を選定し、プレゼンスを高めるための実利的な国際化戦略を立てている点は、日本の中堅大学にとって参考になるかと思われた

学内外それぞれに国際化戦略を立てている点、それらを共有いただけたことに、UEA の国際化に対する自信を感じた。学内では、国際化ビジョンを明言し学生と共有していること、組織のトップレベルで国際化に向けた協力体制があることが印象的だった。学外に対しては、“The 3Rs” (レピュテーション (reputation)、研究 (research)、収入 (revenue)) をキーワードとし、海外パートナーシップ構築優先国を具体的に定めている点が印象的だった。



UEA では、大学としての国際戦略の一環として、「アメリカ、中国、インド、東南アジア、日本」を重点国／地域として定めている。しかし、UEA に所属している教員の中にはこれらの重点国／地域以外の大学等と連携している教員もいることが大いに想像できたため、重点国／地域を 5 つに絞るにあたって学内の反発がなかったのか、またその調整をどのように行ったのか関心があった。この点、「教員が行う研究活動と大学の国際戦略とは全く異なるものであるため、国際的なインパクトを考慮し、トップダウンで 5 つの重点国／地域を決定した」とのことだった。つまり、共著論文を発表した際にインパクトが大きい国／地域や優秀な留学生の受入れが見込まれる国／地域を考慮して選定した、とのことである。日本の大学では、各学部や各教員が行う国際的な研究活動等の取組みを総花的に網羅しつつ国際戦略を練っていく傾向があるかもしれないが、このような形で割り切り、大学としての重点国／地域を定めるというのは新鮮だった。

大学としての取組みや方針という視点からは少しずれるかもしれないが、国際化へ向けた一歩として、UEA のホスピタリティーは学ぶべき姿勢だと感じた。プログラムの 1 つ 1 つに綿密な計画に基づく事前準備の跡がうかがえた。

たとえば昼食の時間は、1 人 1 人座席が指定され、訪問側と受入側が交互に着席できるよう配慮がなされていた。あとから振り返ると、「昼食」1 つ取っても正真正銘のプログラムの一部として位置づけられていたことが分かる。「現地職員との交流」を具体化するうえで一番有効な手立ては、効果的な座席配置であることが肌で実感できた。なお UEA 以外の訪問先では、座席指定は見受けられなかった。

また、午後のディスカッションにおいては、班分けと座席指定にとどまらず、進行役 (ファシリテーター) の働きとテーマごとの事前プレゼンテーションが印象的だった。議論を円滑かつ活発に進めるためには有能なファシリテーターの存在が不可欠だが、大変高度な状況判断力とコミュニケーション力が必要とされると思った。また、テーマごとの事前プレゼンテーショ



ンは、ディスカッションに入りやすくするための動機づけとして有効であった。ファシリテーターやプレゼンターが時折はさみこむ日本語をまじえたジョークも、場の空気を盛り上げるのに一役買っていた。

「異文化圏からの訪問者をいかにもてなすか」という課題は、国際化へ向けた小さな一歩にすぎないかもしれないが、重要な一歩であると思う。自身が海外からの訪問者を受け入れる立場に立ったときには、UEA のホスピタリティーを大いに参考にしたい。

5. 報告者所感

学術交流協定締結などの国際交流実務において発生する問題点の多くは双方で共通していることがわかり、英国大学の実務担当者やネットワーキングやディスカッションを通してこれらを共感できたことは、今後業務を行う際の心理的ハードルの低下に繋がったと感じる。

UEA の発表を一方向的に聞くだけでなく、小グループに分かれてディスカッションする機会があることで、活発な意見交換がなされ、大学間の交流がより一層深まったと感じた。「このように日本の大学を迎え情報共有すること自体が大学の国際化である」、とおっしゃった UEA スタッフの発言が印象的だった。

訪問先大学のプレゼンを聞き、その後質疑を行う形式が多かったが、質疑の時間がない場合もあった。その中で、ネットワーキングの時間はとても貴重だった。昼食やブレイクの際に、プレゼンの時に不明に思った点等を確認することができただけでなく、付随する情報も得ることができた。

訪問先の大学を問わず、個々人との交流を通じて、また数多くのプレゼンテーションを聞いて感じたことは、現地職員の方々が、自らの肩書や職務に大きな自負心を抱いていることだった。要因の 1 つとして、日本の大学職員が通常複数の部署を数年単位で異動する「総合職型」なのに対し、イギリスの大学職員は 1 つのポジションに長期間とどまる「専門職型」であることが考えられる。大きな自負心に裏打ちされた堂々たるプレゼンテーションは、是非見習って参考にしたいと思う。

(報告担当：本間、佐藤、平山、飯沢)

第7回英国大学視察訪問 参加者リスト

参加者リスト(所属機関名アルファベット順、敬称略)			
1	瀬尾 匡輝	茨城大学	留学生センター 講師
2	武田 由美子	茨城大学	学務部留学交流課 留学生支援係長
3	本間 珠梨	慶應義塾大学	国際連携推進室 事務員
4	宇和川 龍	神戸大学	医事課 一般職員
5	奥村 昌晃	神戸大学	医学部 管理課 一般職員
6	申 英姫	京都大学	国際交流推進機構 国際教育支援室 国際教育アドミニストレーター
7	佐藤 伸一郎	九州大学	国際部留学生課留学生交流係 係長
8	源島 福己	長崎大学	多文化社会学部 教授
9	松岡 奈津子	名古屋大学	教育推進部 学生交流課 係長
10	古谷 礼子	名古屋大学	工学研究科 国際交流室
11	日笠 誠	沖縄科学技術大学院大学	研究科長オフィス 渉外調整コーディネーター
12	河合 正徳	立命館アジア太平洋大学	アカデミック・オフィス 専任職員
13	平山 博隆	東北大学	国際交流課 国際学術係長
14	赤松 英香	東海大学	教育支援センター 教育支援課 事務職員
15	牧野 崇行	東京工業大学	国際部国際連携課 総務グループ長
16	木村 公優	東京工業大学	学務部入試課 大学院入試グループ スタッフ
17	飯沢 遼一	東京外国語大学	教務課 係員
Observer	岡田 高文	独立行政法人日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター	国際協力員
Observer	亀澤 剛	独立行政法人日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター	国際協力員

(所属機関・役職は 2015 年 11 月時点のものです。)